

2011.3.11

大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた 《 いいつたえ、むかしばなし、はなし 》—その2—

宮城県教育委員会の委託を受けて「宮城県民話伝承調査」をおこなったのは、1985年から1988年の3カ年でした。いまから、26年ほど前のことになります。

その時に、聞き書きした宮城県各地の民話は2513話、民話を語ってくださった方は388人に及びました。

これらの記録は、『宮城県文化財調査報告書第130集—宮城県の民話』（1988年3月刊）としてまとめ、宮城県教育委員会から出版されましたが、当時の区割りによる74市町村から、3話ないし5話を選んで活字化するという形でした。したがって、集めた民話の約1割に当たる274話のみの収録となりました。残りの2200話あまりの民話の記録と、語ってくださった話者の声は、わたしたちの手許に置かれたままでした。

これらの貴重な記録と語られた声は、わたしたちが採訪して集めた他の民話とともに、目下、「民話 声の図書室」の大切な材料として、みなさんと共有すべく作業をすすめています。

いま、ここに紹介する民話は、かつて「民話伝承調査」をおこなった時に聞いたものであり、2011年3月11日、津波に襲われて、被災した集落で語られていた民話です。語った方の大部分は、震災の前にすでに亡くなっています。そして、語られた土地の姿は、いま変わり果てました。

しかし、手許に残った語りは、ここで生きていた人々の姿を、ありありとわたしたちに伝えてくれます。それは、この土地特有の話もあれば、そうでないものもあります。日本民俗学が分類した口承文芸の分野に属する典型的な話型が、「実話」として語られていることも見逃せない大事な点です。人々の暮らしがいつも「物語」とともにあったことを教えてくれます。

それらすべてを含めて、「この土地で語られていた民話」という括りでまとめてみました。

よその土地からもたらされた話や、隣町での出来事を語るものや、遠くの島のいわれを教える話や、全国的に話型がみられるものがこの土地らしい姿で根付いた話など、さまざまな方法でムラに蒔かれた話の種が、ここで暮してきた人々の胸であたためられて、語り継がれていたことを忘れたくありません。

「2011.3.11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた《 いいつたえ、むかしばなし、はなし 》」というテーマのもとに、シリーズで、みなさんに届けていく計画です。

一回目は、本吉郡南三陸町戸倉で聞いた語りのなかから、8話を紹介しました。今回は、石巻市雄勝町周辺の浜で聞いた民話を紹介いたします。

石巻市雄勝町周辺の浜の民話

第一話	へびに見染められた娘
第二話	じょうるり 浄瑠璃語ったネコ
第三話	むこ 贅は親父に、親父は爺ちに
第四話	お湯立ての地名のいわれ
第五話	船ゆうれいの話
第六話	力持ちのはたらき

- (1) 久内さんのクネ道
- (2) 山賊を追い払う
- (3) 馬になって代掻きするしろか
- (4) 雄勝硯すずり

第七話	キツネがいっぱい、いっぱい
-----	---------------

- (1) 留おんつあんとキツネ
- (2) キツネに連れていかれた五郎つあん
- (3) 嘉右衛門さんとおろくばあさん
- (4) キツネに負けなかった話
- (5) 鍋に化けたキツネ
- (6) キツネとシオリ貝

第一話 ヘビに見染められた娘

わたしが若い頃に、ほんとにあったことだといって聞いた話だけどねえ。ある家で娘とおばあさんとして暮しておったんだと。

そしたら、毎晩、娘のどこさ男が通ってくるようになったんだと。
んだげんとも、おばあさんから見ると、なんだか、その男、影がうすいんだとな。

「これはたいへんだ」
ってことで、その娘に言ったんだと。

「やあや、これこれ、おめえどこに来てる男はなあ、人間でねえんだよ。おれの言うことが嘘だと思ったら、男に焙烙ほうろくで米を炒らせてみろ。おめえはおしっこに行くふりして、その間に、火にかけた焙烙ほうろくで米を炒らせてみろ。そしたら正体がわかるから」

娘は首を傾げながらも、おしっこに行くふりして、まがって見たれば、なんと男はヘビの身体になって自在鉤じざいかぎ（囲炉裏の上にさげて鍋などを吊す道具）にぐるぐるからまって、尾っぽで米ば炒ってやんだと。
娘、びっくりしたんだねえ。どうやってこのヘビを追っ払ったらいいかって、おばあさんに聞いたんだと。
そしたれば、おばあさん、こんなことを教えたんだと。

「ほんだらな、おれ、今日一日がかりで、麻で糸を紡ぐから、今夜、男が来たらば、大きい針にその糸を通して、衣装いしょう（着物）の裾に縫いつけてやれ」

ほうして、そのとうりにやったところが、若い男は、うなり声をあげながら、そそくさと帰っていったんだと。
それで、その糸をずっとどこまでものぼして、たどって行ったら、そこの荒浜へ行く道のところの大きなケヤキの洞ほくらさ入って行って、「うーうー」と、うなっているんだと。ヘビの身体には金や鉄は毒くろがねなんだ。針を刺されてその毒がまわったんだね。

そうしていたところが、洞ほくらのなかから話し声するんだと。
「な、だから、人間の娘のどこなど行くなって言ったんだぞ。鉄の毒くろがねつうものは一生なおらねえんだから。おれの言うことを聞かないからだ、ざま見ろ」

なんだか年取ったおばあさんの声言ってるんだと。そしたれば、こんど若い男の声で、
「なに、おれ死んでも、ちゃんと妊みごもらせてきたから、子種は残るんだ」
って言うんだと。したれば、また、おばあさんの声が、
「なに語るつけやあ。人間つうものは利巧なもので、五月のショウブとヨモギを入れた湯に入れば、みなおち墮おちることになってんだ」
って語ったと。

家さ帰ってきて、さっそくショウブとヨモギを刈って、裾湯をつかわせたら、タライいっぱいもヘビの子が出たんだと。それで、娘は助かったんだね。よかったのしゃ。

そのケヤキの木は、今はなくなったけれど、五人しても抱き回されないほど太い、神様の木だったんだよ。
いつもしめ縄巻いてあったね。

第二話

浄瑠璃語ったネコ

雄勝に日本一の浄瑠璃語りが来たんだと。

浄瑠璃つうの聞いたことも見たこともなかったんだけど、「来るんだから、行ってみんべ」となって、みんなして行ったんだとしゃ。

ところが、ある家で嫁っこばり家に残されて、みんなは二晩目も、そろって行くんだとしゃ。
「なんだなあ。おら家^えで、親父も親父だ。おれば、一人残して、義理にも“いっしょにあべ(行こう)”って言わんねんだかなあ」
って、一人で愚痴^{ぐぜ}こと語ったんだと。

したら、飼ってるネコが、それを聞いて言ったんだと。
「んでえ、おら、浄瑠璃語ってみせっから。ただ、おれが語ったことはほかの人さ言うと、うまくねえから、黙ってろな。もし、それを言ったら、あんたの喉を食い破って殺すからな」
嫁っこは、それ聞いてたまげたけども、浄瑠璃聞きたいばかりに、
「語んねえから。絶対に語んねえから」
って約束したんだと。そうしたら、ネコ、ほんとうに浄瑠璃語りはじめたと。

その時しゃ。姑ばあさまが、なにか用あって、早く家に帰ってきたら、なんだか、家のなかから、男の声で、浄瑠璃語っているのが聞こえるんだと。
「おうー。おうー。お、お、おっー」
って語ってるから、たまげてしまったんだと。
「おら家^えの嫁は、男を引っ張り込んで、歌わせているのかや」

ばあさま、蔭のほうでしばらく聞いていたが、あらまし聞いてから、がらっと戸を開けて、
「男を引っ張り込んで歌ってたべ」
って、嫁っこに食ってかかったんだと。
それ聞いて、ネコあ、べろべろと根太^{ねだ}(縁の下)さ入ってしまったと。

嫁っこは、姑ばあさんに責められて、責められて、とうとう、ネコが浄瑠璃語ったことを言ってしまったつつんだ。
「わたし、こいつしゃべったら、喉を食い破って殺すってネコに言われたんだ」
って、嫁っこが泣くと、姑ばあさんも困ってしまって、そして、嫁っこのどこを家から一步も出さないようにしておいたんだと。いままでは、大浜の実家さ、時々、行ってたのも止めて、じっと家のなかにおいていたんだと。

一方、ネコのほうは、大浜の明神の上がり口に松の木あるんだが、そいつさ登って、嫁っこが来るのを待ち構えていたんだと。喉を食い破ってくれようと思って、水も飲まねえ、餌も食わねえで、一ヶ月も木の上で待っていたんだと。ところが、いつまでたっても嫁っこが来ないから、とうとう弱ってしまって、木から落ちて死んでしまったんだと。

この話は、おれが小学校三年あたり(大正十五年頃)で聞いたんだが、語ってくれたおぼんつあんは、「これは実際にあったことだ」って言っていたから、ほんとの話なんだべな。

第三話

聾は親父に、親父は爺ちに

むかし、うんと頑固な親父のところに、うんときれいな娘がいたんだと。

村の男たちは、みんな娘の^{むこ}聾になりたいと思ったんだが、

「あの頑固親父ではなあ。聾になりたいと申し込んだら、なんと言われるかわがんねえ」

って、言い出しかねていたんだと。

そしたっけ、村でも指折りの、ちっと足りねえ男がいて、なじよなことをしたのか、ちゃんと仲人をたてて、娘を嫁にもらうことにしたんだと。

村の男どもは怒ってやあ、腹のムシが治まんねえ。

「ほんでえ、この縁談、めちゃめちゃにぶっ壊してやるべ。それにしても、はて、なじよして壊すべか」

みんなで相談ぶって、その男を呼び出したんだと。そして言ったんだと。

「これ、おめえ、祝言のお振る舞^ふえの時、仲人親父^{うたい}が謡をうたうべから、それがおわったらな、すぐに裸^{ふんどし}になれよ。禪一本で、踊り踊れや。それも、ただ踊らねえで、唄いながら踊るんだ。そうずっと、うんと喜ばれっからやあ。その唄を教えるから、よく憶えておけよ」

こう言って、こんな唄を教えたんだと。

聾だ聾だと思ってるうちに 親父になって

親父になったら ^{じっ}爺ちになって

^{じっ}爺ちになったら ^{じん}爺つあまになって

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

こうしておけば、あの頑固親父、がんがん怒って、聾を追い出すにちがいねえ、と考えたわけしゃ。

そして、祝言の日に、男どもみんなして見にいったんだと。

そうしたら、やっぱり仲人親父の謡があって、そのあとすぐに聾が裸になって踊りはじまったんだと。

聾だ聾だと思ってるうちに 親父になって

親父になったら ^{じっ}爺ちになって

^{じっ}爺ちになったら ^{じん}爺つあまになって

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

ところが、それを見た頑固親父は、すっかり感心してしまって、
「この聾、馬鹿だのなんだのって言われてっけども、なかなか道理のわかった奴だ。そうだ、そうだ。聾か
ら親父、親父から爺^{じっ}ち、爺^{じっ}ちから、あっという間に仏さまだ。それが人間というものだ」

こう言って、うんと喜んだんだと。そして、
「それ、娘、おめえも負けないで、ひとつやってみろ」
って言うもんだから、娘も裸になって、腰巻きひとつになって、唄ったんだとや。

嫁だ嫁だと思ってるうちに おっ母^{かあ}になって

おっ母^{かあ}になったら 婆^{ばっ}っばになって

婆^{ばっ}ばになったら 婆^{ばん}つあまになって

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

聾と嫁と二人して踊って唄ったんだと。

そしたら、両方の親たちから仲人から、みんなで踊り出して、

「はあ、めでたい めでたい」

って唄って、二人は末永く、それは幸せに暮らしたんだとしゃ。

第四話

お湯立ての地名のいわれ

むかしむかし。

天照大神が天の岩戸^{あま いわと}にかくれた時、神さまという神さま、みんな集まって、七日七晩、踊り踊ったんだとしゃ。

「天照大神さま。早く出てこ。あんたがいないと、この世は暗くてわかんねえ」

って、みんなで踊り踊って騒いでいたんだね。

ところが、天照大神はさっぱり出てこねえし、神さまだちは汗流して踊ってて、風呂さも入れねえんだと。

神さまだち、困ってしまったのしゃ。

そんとき、一人の神さまが、みんなのために湯わかして、笹の葉っぱをその湯に浸して、風呂のかわりに、ぱっ、ぱっとかけて、汗をとってやったんだと。

「これはいい。これはいい」

って、みんなうんと喜んだんだとしゃ。

また、天照大神も、ずっと岩戸にかくれていたから、

「さぞかし、汗くさくなってるべなあ」

って、岩戸をちょっと開けてのぞいた時に、ぱっ、ぱっ、ぱっと、笹の葉っぱでお湯かけて、汗くさいのを取ってやったんだとしゃ。

その時から、そこを「お湯立て」というようになったんだとしゃ。今もあるんだよ。

第五話 船ゆうれいの話

わたしたちが小さいとき「これは実話だ」って聞かせられたんだよ。

むかしは帆かけ船、帆船だから、風を受けて風下へ向かっていくんだね。風上へ向かうことはないのしゃ。

ところが、沖の方で風上へ走っていく船が見えることがあるんだと。

そういう日は、霧がかかってて、小雨模様なんだね。

おかしいことに、その風上さ走る船を見ると、誘われるように、われの船も風上さ走らせたくなるんだと。そんで、走って走って、目の前に帆をいっぱいに張ったその船が見えてきたので、ついて行くべとすると、船がぱっと消えるんだと。

んでえ、そのまま風上さ行くつと、船、ひっくり返って沈んでしまうんだ。

ゆうれい船が、ほかの船をさそって風上さ連れていって、その船を沈めべとすんだっちゃ。

それから、沖で見慣れない船に会うことがあるんだよ。

「やあ、いま船に水が入ったから、なにか汲み出す物、貸してけろ」

って、その船から声がするんだと。それで、柄杓なんか貸してやると、それで、こちらの船に水をどんどん入れるんだ。沈めてやるべとしてね。貸してもらうまで、

「柄長（柄杓）、貸してけろー。柄長貸してけろー」

って叫ぶんだよ、これもゆうれい船の仕業なのしゃ。

んだから、貸してやる時は、底を抜いて貸してやんねえとなんないんだよ。

それからね、沖から港の近くまで来て、ほっとしていると、ものすごい波吹雪が上がって、なかなか港さ入れねえんだね。

「さっきまで、あんなに風いでいたのに、なじよなわけだ」

ってふしぎなんだけど、それもゆうれい船の仕業っていわれているんだよ。

仲間の船を、港さ帰したくなくて、波吹雪をあげて、邪魔しているんだね。

そういう時ね、股の間から逆さになって、海を見るとゆうれい船の姿が見えるんだよ。

むかしあ、船で死んだ人が出ると、家まで運んでこねえで、かならず船から海へ投げてることになってた。そのまま投げて帰るんだが、船が離れようとする、海の中から、

「桶っこ、貸してけろー。桶っこ、貸してけろー」

って声が、ずすらーずすらーと近づいてくるんだと。

その時は、かならず桶の底を抜いて貸してやるんだよ。

そうでないと、桶で水汲んで、船のなかにいれてよこして、船を沈めてしまうんだ。

ひとりで、海に残されるのがさびしいんだべな。

第六話

力持ちのはたらき

(1) ^{くない}久内さんのクネ道

ここでは「クネ道」つうけどもね、ほんとうは「クナイ道」なんだ。
それというのも「^{くない}久内さん」つうたいへんに力のある人がいて、自分の部落でもないよその山で木を伐つてくるんだと。

山に入る入会権（山に入ってもいいという権利書）もない貧しい家だったから、自分の部落の山さ入って、その木を盗むのは気がひけたんだべな。峠を越えて、隣の部落のかげのほうの山で木を伐って、そいつ、そのまま家まで引っ張ってきていたんだと。

隣の部落の人たちの間でも、そのことが評判になって、
「なんだ。おら方^はの山で木を伐ってる奴がいるぞ」

ある時、見に来たんだと。

そしたら、丁度に木を伐って、引っ張ってくるどこだったってよ。

隣部落の人たちは五、六人で行って、久内さんさ文句言ったっけが、なにしろ久内さんは力持ちだから、反対にみんなをやっつけて、ゆうゆうと木を引っ張って帰ってきたんだと。

久内さんが、木を引っ張って歩いた跡が、ずっと道になって、それを「クネ道」と呼ぶようになったんだと。
おれたちにとっては、便利で大事な道をつくってもらったようなものじゃ。

堂々と、伐った大木の根元に縄つけて、山道を引っ張ってきたつうんだから、たいした力持ちだったな。

(2) 山賊を追い払う

力持ちの話はたくさんあるね。

みんな力持ちになりたかったのじゃ。力がなければ、おれたちの暮らしは立たねえんだ。

おらほうの部落に、今で言う宅急便のような仕事をしてる人があって、馬に荷をつけて、町から町へと歩く人じゃ。一日に十里（40キロメートル）も歩いたっていうんだ。

あるとき、いつも決めている宿に行ったところ、宿のばあさんが困っていたと。

なんでも山賊のような奴らがいて、その宿に泊って、飲み食いしたあげく、金も払わねえで、暴れていたんだと。宿のばあさんが、泣きながら、

「助けてけろー」

って、すがりついたんだと。

「待ってろ。いま、助けるから」

その力持ちは、馬から鞍^{くら}から、積んでた荷物から、みんな背負って、

「どっこいしょ」

と言って、山賊たちの前に置いて、にらみつけた。そしたら、山賊どもはたまげてやあ、

「この力持ちには、かなわねえ」

って、逃げてってしまったそうなの。

(3) 馬になって代掻き^{しろかき}する

むかし。ここの浜には田圃^{たんぼ}がなかったんだよ。

それで、峠を越えた向こうの山まで行って、耕して田圃つくっていたんだね。

あるおじいさんは、おばあさんと二人でいつも山さ行って田圃つくりしていたんだと。

ところが、その土地は底なし沼で、足を入れると深く深く沈みこむから、馬を入れることができないんだと。

ほんで、おじいさんが馬の代わりになって、馬鋤つけて泥田を耕したんだって。

おばあさんが、後ろから馬鋤押して、おじいさんが馬みだくなって、それ曳いて、やっと田圃つくったんだね。

ところが、峠超えて行くんだから、時間がかかって、すぐに日が暮れてしまうんだね。

それで、馬になるおじいさんは、

「ばあさんや。また、田圃から出て足洗ったりなんかしてると、時間食うから、ここでお昼食うべ」
って言って、足も洗わないで、泥だらけのまんま、お昼食って、それからまた自分が馬になって、ばあさんに後ろから押してもらって、そうやって難儀して田圃をこさえたんだよ。

このおじいさんも、たいした力持ちのなしゃ、馬の代わりするんだからね。

(4) 雄勝硯^{すずり}

むかしはここ雄勝に、監獄があったんだよ。

当時は、このあたりは陸の孤島で、逃げてもすぐに抑えられやすかったんだべな。そんで、ここに刑務所ができたんだね。

刑務所は明治初年に建てられて、ここさ送られてくる罪人のうちで、力のある奴が、そのスレート山さ行って、スレート岩を剥がして採ってくるようになったんだと。

それを加工して、雄勝の人たちが作るようになったのが、いまも有名な雄勝硯のはじまりだって聞いていたね。このスレートは、うんと固くて、力持ちでないと削られねえんだって言われていた。それで、力のある奴が、そいつを削ってきたんだね。だけんども、明治29年の大津波があったとき、監獄も流されてしまっして、亡くなった人もたくさんいたそうさ。

雄勝の硯がたいしたもんだと評判になって、この道でいい仕事をする人がふえ、雄勝の硯は有名になっていったんだよ。

第七話 キツネがいっぱい、いっぱい

(1) 留^{とめ}おんつあんとキツネ

すこしむかしね、留おんつあんで人がいて、いつもキツネに化かされていたんだと。

船宿なんかに寄って、帰りにお土産持ってくると、途中に女房がいてね、竹藪の中さ連れていかれるんだと。そこで、「お土産、渡せ」って言われてみんな渡すんだと。

空手で家さ帰ってきてね、女房に、
「おめえ、さっき迎えに来たか」
って聞くと、女房は首振って言うんだと。

「だれえ、迎えになんか行くもんか。子どもだっているんだから」

留おんつあんは、首傾げてな、黙って考え込んでしまうんだと。
キツネが女房に化けて現れて、お土産を持っていったんだね。

その留おんつあんがね、石巻さ行つての帰り、正月の餅^{しよ}背負って真野峠まで来たんだと。

そしたら、すたすたと後ろから女の人がついてくるんだと。正月だから、ちゃんと仕度してんだけっど、
なんだかおかしいんだね。それというのも、峠を超えるのに、足袋も履いてねえし、脛^{すね}当てもしていねえんだ。

これはおかしい、もしかしてキツネかな、と思ったから、しばらく行ってから、
「姉さん。ひと休みすんべか。こっちさ寄ってこらせ」
って、声かけたれば、その女、一間(約2メートル)ほどはなれて座って、こっちさ寄ってこねんだと。

何回、休んでみても、いつもそばに寄らねえから、ますます怪しいと思って、
「姉さん。先に行つてけらいん。おれ、小便すっから」
って言って、先に歩かせておいて、そばにあった木の棒をつかんで、後ろからガーンツとやったんだと。
そしたら、そこさ倒れてしまつてね、動かねえんだと。なかなかキツネの正体をあらわさねえんだと。
留おんつあん、すっかり困つてやあ、
「おれ、人ば殺してしまったわい」

って、泣き泣き家さ帰って、女房にそのわけを話してや、小さい子どもだちの頭を撫でて別れの挨拶して、
まず、泣きながら自首するために、家を出たんだと。

そうしてるうちに、お日さまが上がってきて、先の女に、ぱっと光が当たったんだと。そうしたら、尻尾の
ほうから、キツネになってきて、とうとう化けの皮が剥がれたんだと。

留おんつあんは喜んでやあ、そのキツネを括^{わけはま}って、ここ分^{わけはま}浜さ持ってきたんだと。古いキツネでやあ、
尻尾だけでも、普通のキツネの一匹分ほどもあったと。

キツネの舌は、子どもの熱冷ましにいいんだよ。乾かしておいて、それを削って、みんなに分けて喜ば
れたつうことだ。

(2) キツネに連れていかれた五郎つあん

小学校四年生のころね、歌津の方の人だったけれど、五郎つあんで人、キツネに連れて行かれたことがあったの。

学校の生徒みんなで、山の外をぐるっと囲んで並んでね、ブリキの一斗缶にひもをつけて、ガンガンと鳴らしてね、山の中に入っていったんだよ。消防団の人も来て、みんなで、一列に並ばせられて、歩いて行くの。

「五郎つあーん。五郎つあーん」

名前を呼びながら、山を巻いて尋ねたの。

ほんでも見つからなくてね、その日は、みんな帰ったんだ。

そしたら、次の朝ね、暗いうちに、ふっと帰ってきて、家の台所口に立っていたんだと。

「昨夜はどこにいたんだ」

って聞くと、五郎つあん、

「ご飯、^{はん}食わせられて、うどんも食わせられた」

って、けろっとしてんだと。

「うどんってか、どんなうどんだ、」

「ミミズのうどんだった」

五郎つあん、うれしそうに言うんだよ。

「それからやあ、木の葉っぱ、いっぱい敷いた沢のところで寝せてもらった」

って、まるでキツネと面白いこととして遊んできたみだく言うんだよ。

こんなこと、時々あったのしゃ。

(3) 嘉右衛門さんとおろくばあさん

ちょっと前、おろくばあさんと、嘉右衛門さんという若い方が、青島へキノコ採りに行ったんだと。ずっと、キノコ採りしてて、もうだいぶ採ったからって、おろくばあさんは腰おろして嘉右衛門さんが、山を下りてくるのを待っていたんだと。

ところが、いつまでたっても来ないから、おろくばあさんは山を登っていったと。

したら、嘉右衛門さん、水がわずか溜まってるところで、お湯に入ったつもりで、泥まぶりになっているんだと。着物もなにもすっかり脱いで、真っ裸になってだよ。

「ああ。いい湯だ。いい湯だ」

って、その泥水に浸かっているんだと。

「これ、嘉右衛門。おまえ、キツネに化かされたんだから」

って言っても聞かないで、真っ黒な泥水で身体を洗って、にたにたしていたんだと。

これは、嘉右衛門さんが二十かそこらのときに、ほんとにあったことだって、わたし、おろくばあさんに聞かせられたんだよ。

(4) キツネに負けなかった話

終戦のあとしばらくしてからのことだった。昭和28年か29年のことだね。

そのころ、わたしは呉服物を背負って、商いに歩いていたのね。

そして、ある年、お正月だから休めばいいのに、お年始物を頼まれていたから、お正月の4日に名振^{なぶり}まで行ったの。

ほうして、名振に着いたれば、

「ああ、よく来てけたなあ」

って、反物、またよく売れたのしゃ。

ほうして、3時ころになって、ちょっと薄暗くなった山道を登って帰った。バスが行ってしまったので、仕方なくてずっと山を登ってきたわけしゃ。

なんだか背負っている荷物が傾いて、按配^{あんべえ}悪いから、山の頂上あたりで、荷物下ろして、風呂敷解いて拡げて、包みなおしたんだね。

そんなことしてるうちに日も傾いてきたから、

「さあ、いっしょけんめに歩いて行かなきゃ、真っ暗になるなあ」

って、10キロくらい歩いたかなあ、なんだか後ろから来るものがあるんだね。

へえっ！　　へえっ！　　へえっ！

息はずませて、後ろから近寄ってくるんだね。

ほうして、チャラチャラ、チャラチャラって、なにか音も立てるんだちゃ。

「それにしても、いまごろ、こんな山の中をだれが来るんだろう、どうゆう人なんだろう。ちょっと見ましょう」

わたし、後ろをちょっと見たのね。

そうしたら、その音が消えて、しーんとしてるんだねえ。

「あらあ、おかしいな」

歩き出すと、また、さっきよりも大きい音立ててくるの。

へえっ！　　へえっ！　　へえっ！

こんどは飛びついてくるように、すぐ耳のどこで音がするのしゃ。

「これは困った」

わたしは脇道さ入ってみたの。そうしたら、なおさら大きい音で、ヒューーヒューー言っつついてくるんだよ。おっかなくてしゃあ。

「これはキツネかムジナにちがいねえ。んでも、ここで死んでいられねえちゃ」

わたしは、よしと^{はら}と肚きめて、こんどはぬけぬけと歩いたもんだよ。おっかねえのを、じっとこらえてよ、平気な顔でぬけぬけと歩いたんだな。

そう思った瞬間に、こんどはガチャガチャガチャと妙な音がしてね、いまにも飛びかかれるかと思ったよ。それで、ただいっしょけんめに歩いた、歩いた。

遠くに明かりが見えてほっとしたっけが、こんどはホウホウって呼ぶんだね。

知らんぶりして、また歩いているうちに、その音も消えていったんだよ。

あそこで負けてしまえば、キツネにいいようにされて、ここにいないかもしれないね。

(5) 鍋に化けたキツネ

熊澤へ行く途中に、大きなモミの木があるんですよ。

三人四人でも抱き回されないほど太い木で、何百年にもなるモミの木でね、そこを通るのはうんと淋しくて怖いんだよ。昼間でも暗くて、じめじめしていてね。

あるとき、鍋を売って歩く人がいて、たくさん鍋を担いで、そこを通りかかったんだと。

ほうしたら、そこにキツネがいてね、昼寝していたんだと。鍋売りは、いたづら心をだして、そのキツネどこ、「おっ!」とおどかしてやったんだと。

キツネは、鍋売りのほうを、ジロツジロツと見て、何回も振り向いて逃げていったんだと。

鍋売りは、そこを通って熊澤まで行って、鍋売っていい商売してね、残った鍋を担いで、またそこを通りかかったんだと。

「明日、またこれを売って金にするべ」

鍋売りは、そんなことを言って、鍋をそこに置いてひと休みしたんだと。

そうしたら、いつのまにか鍋が一つふえているんだと。

「なんだ、キツネ野郎。鍋に化けやがったな」

鍋売りは、片っ端から鍋を叩いて、キツネの正体を見ようとしたんだと。

そうしてるうちに、売り物の鍋をみんな壊してしまったのしゃ。

キツネに一本取られ、仕返しされたんだね。

(6) キツネとシオリ貝

むかしは十月ころになると、海の潮が満潮になって、それが引くと、前の島まで水一滴もなくなって、道路ができるんだよ。そこで、浜の人たちはいろいろな貝を採っていたが、キツネの野郎も島の山からそれを見ていたんだべね。

あるとき、下りてきて、潮の引いた浜で、人間の真似してニタリ貝だのシオリ貝だの採って、食っていたんだと。

そうしてるうちに、口を開いていたシオリ貝の大きいやつを見つけて、手を入れたところ、貝がぐっと口をとじたから、手を挟まれて、取ることができなくなってしまったと。

キャーッ キャーッ キャーッ

手から血をたらして泣いているうちに、だんだんに水が満ちてきて、キツネも濡れてくるからね、ばしゃばしゃと水を搔いて、騒いでいたんだと。

漁師さんがそれを見てね、船を寄せて、シオリ貝から手を抜いてやったんだと。

そして、そのまま船に乗せて、家までつれてきてね、傷の手当てをしてやったんだと。

その時から、キツネがいたその島を「狐島」とよぶようになったんだよ。

人とキツネだっても、いつもいつも化かし合いして、仲が悪かったわけでもねえんだね。